



Title	春木仁孝先生 研究業績一覧
Author(s)	
Citation	Gallia. 2017, 56, p. 8-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69827
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

春木仁孝先生 研究業績一覧

著書

専門書

1. 『フランス語とはどういう言語か』（大橋保夫他 10 氏との共著），駿河台出版社，1993 年 4 月
2. 『言語文化学への招待』（木村健治・金崎春幸編、木村健治氏他 20 氏との共著），大阪大学出版会，2008 年 3 月。
3. 『エクリチュールの冒険 ―新編・フランス文学史―』（柏木隆雄氏他 20 氏との共著），大阪大学出版会，2003 年 12 月。

概説書・教科書

1. 『フランス語への架け橋 ―初級文法を考える―』大阪大学言語文化部，1983 年 3 月
2. 『レクチュールの冒険 ―新編・フランス文学選―』（柏木隆雄氏他 20 氏との共編），朝日出版社，2005 年 4 月。（改訂第 2 刷 2016 年 3 月）
3. 『フランス語へのかけ橋』白水社，1994 年 3 月。（改訂版 1999 年 3 月）
4. 『フランス文法 かたちとしくみ』白水社，2009 年 4 月。
5. 『DVD フランス文法』朝日出版社，2011 年 1 月。
6. 『新・フランス語文法』（柏木隆雄氏他 7 氏との共著）朝日出版社，2003 年 4 月。（改訂版 2013 年 1 月、三訂版 2016 年 10 月）

辞書・事典

1. 『フランス文学小事典』（柏木隆雄氏他 6 氏との共編），朝日出版社，2007 年 3 月。
2. 『ロワイヤル仏和中辞典』（倉方秀憲氏他 10 氏との共編），旺文社，1985 年 1 月。（第 2 版 2005 年 1 月）
3. 『プチ・ロワイヤル仏和中辞典』（倉方秀憲氏他 10 氏との共編），旺文社，1986 年 1 月。（第 2 版 1996 年 1 月）
4. 『プチ・ロワイヤル仏和中辞典改訂第 3 版』（倉方秀憲氏他 3 氏との共編），旺文社，2003 年 1 月。
5. 『プチ・ロワイヤル仏和中辞典改訂第 4 版』（倉方秀憲氏他 3 氏との共編），旺文社，2010 年 1 月。

学位論文

1. Structure communicative et ordre des mots, étude théorique et analyse de l'ancien français. 第 3 課程博士学位論文，フランス，パリ第 4 大学（パリ・ソルボンヌ大学），1981 年 2 月。

論文 (42 のみ共著論文)

1. «L'Étude des rimes dans les Lais de Marie de France» *GALLIA* XVI, pp.1-11. 大阪大学フランス語フランス文学会, 1976 年 3 月.
2. 「古フランス語の語順について—thème-rhème の観点から—」『待兼山論叢』文学篇 12, pp.37-55. 大阪大学文学会, 1978 年 12 月.
3. 「古フランス語における 2 格体系の崩壊と語順の関係について」『ロマンス語研究』13-14, pp.1-11. 日本ロマンス語学会, 1981 年 9 月.
4. 「parataxe から hypotaxe へ —フランス語 ce の場合—」『言語文化研究』8, pp.217-230. 大阪大学言語文化部, 1982 年 3 月.
5. «Structure communicative de l'énoncé —examen de thème—」『言語文化研究』9, pp.81-95. 大阪大学言語文化部, 1983 年 3 月.
6. «Impersonnel du français —Ses caractéristiques et son implication théorique—」『日・仏語の対照言語学的研究論集』, pp.147-165. 早稲田大学文学部, 1983 年 3 月.
7. «Résidu de l'analyse grammaticale —impersonnel discursif du français—» *GALLIA* XXI-XXII, pp.279-288. 大阪大学フランス語フランス文学会, 1983 年 3 月.
8. 「フランス語の非人称構文 —副詞的要素の機能と énonciation—」『フランス語学研究』17, pp.18-35. 日本フランス語学研究会, 1983 年 5 月.
9. «Zone préverbale en ancien français」『言語文化研究』10, pp.219-236. 大阪大学言語文化部, 1984 年 3 月.
10. 「ルーマニア語における目的語の代名詞による二重化について」『ロマンス語研究』17, pp.39-51. 日本ロマンス語学会, 1984 年 5 月.
11. «Ordre des mots comme réalisation de la structure communicative」『言語文化研究』11, pp.171-187. 大阪大学言語文化部, 1985 年 3 月.
12. 「ルーマニア語の冠詞 —後置性の限界と他の限定要素との関係—」『ロマンス語研究』18, pp.13-23. 日本ロマンス語学会, 1985 年 5 月.
13. 「le N と ce N による前方照応について」『フランス語学研究』19, pp.88-97. 日本フランス語学研究会, 1985 年 6 月.
14. 「指示形容詞を用いた前方照応について」『フランス語学研究』20, pp.16-32. 日本フランス語学会, 1986 年 5 月.
15. 「フランス語の中立的代名動詞と非人称受身」『言語文化研究』13, pp.63-84. 大阪大学言語文化部, 1987 年 3 月.
16. 「非人称発話における状況補語について—一定位操作とテーマをめぐる—」『言語文化研究』14, pp.245-262. 大阪大学言語文化部, 1988 年 3 月.
17. 「自立形代名詞 moi の左方遊離について」『フランス語学研究』22, pp.35-56. 日本フランス語学会, 1988 年 6 月.
18. 「現代フランス語の「周知の指示形容詞」について」『言語文化研究』16, pp.77-95. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 1990 年 3

月.

19. 「指示対象の性格からみた日本語の指示詞 ―アノを中心に―」『言語文化研究』17, pp.93-113. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 1991年3月.
20. 「ça pleut / il pleut ―現代フランス語の“非人称主語”のçaをめぐる―」『ロマンス語研究』24, pp.27-34. 日本ロマンス語学会, 1991年5月.
21. 「Je ne savais pas que c'était comme ça. ―再確認の半過去―」『フランス語フランス文学研究』59, pp.76-88. 日本フランス語フランス文学会, 1991年10月.
22. 「ジェロンディフ ―現在分詞構文との比較―」*GALLIA* XXXI, pp.12-21. 大阪大学フランス語フランス文学会, 1992年3月.
23. 「時制・アスペクト・モダリティー ―フランス語の半過去の場合―」『言語文化研究』17, pp.293-309. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 1992年3月.
24. «Reprise pronominale et référentialité discursive» *Actes du XX^e Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes* I, pp.273-286. 国際ロマンス語言語学・文献学学会 (Tübingen/Basel: A. Francke Verlag), 1993年3月.
25. «Sur le démonstratif à renvoi notionnel»『言語文化研究』19, pp.179-192. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 1993年3月.
26. 「ジェロンディフの複合形について」『フランス語学研究』27, pp.73-75. 日本フランス語学会, 1993年6月.
27. 「中立的代名動詞と受動的代名動詞」『日仏語対象研究論集』pp.32-52. 日仏語対照研究会, 1994年3月.
28. 「現代フランス語の再帰構文再考 ―意味解釈の仕組みとモダリティー―」『言語文化研究』22, pp.171-194. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 1996年3月.
29. 「意味カテゴリーとしての再帰 ―現代フランス語の場合―」『言語文化研究』23, pp.177-200. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 1997年3月.
30. «Pronominal moyen et pronominal neutre en français moderne» *Atti del XXI Congresso Internazionale di Linguistica et Filologia Romanza* II, pp.405-416. 国際ロマンス語言語学・文献学学会 (Tübingen: Max Niemeyer Verlag), 1998年.
31. 「新しい半過去論の構築に向けて ―Le Goffic, Ducrot, Berthonneau et Kleiberを批判する―」『言語文化研究』25, pp.143-165. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 1999年3月.
32. 「半過去の統一的理解を目指して」『フランス語学研究』33, pp.15-26. 日本フランス語学会, 1999年6月.
33. 「現代フランス語の大過去とテンス・アスペクト」『言語文化研究』26, pp.179-197. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2000年3月.

34. 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo — 半過去の属性付与機能について」『フランス語フランス文学研究』77, pp.84-96. 日本フランス語フランス文学会, 2000 年 10 月.
35. 「テキスト構成とテンス・アスペクト」*GALLIA* XL, pp.11-18. 大阪大学フランス語フランス文学会, 2001 年 3 月.
36. 「MOURIR の時制 — 「語り」における複合過去の機能 —」『現代フランス語のテンス・アスペクト・モダリティー』pp.1-14. 言語文化共同研究プロジェクト 2000, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2001 年 3 月.
37. 「フランス語教育における映画という素材」『異言語・異文化教育におけるマルチメディア教育の可能性』pp.25-34. 言語文化共同研究プロジェクト 2001, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2002 年 3 月.
38. 「『花様年華』スケッチ」『映像と文化』II, pp.1-10. 言語文化共同研究プロジェクト 2001, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2002 年 3 月.
39. 「フランス語の複合過去—発話時との関係の類型化に向けて—」『言語における主観性をめぐって』pp.32-43, 言語文化共同研究プロジェクト 2001, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2002 年 3 月.
40. 「フランス語の再帰構文 — その認知的一体性 —」(西村義樹編)『認知言語学 I: 事象構造』(シリーズ言語科学 - 2) pp.37-62. 東京大学出版会. 2002 年 9 月.
41. 「認知言語学的観点からの日・仏語対象研究の可能性」『言語文化研究』29, pp.333-352. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2003 年 3 月.
42. 「語気助詞”了”のモダリティー機能 — アスペクトからモダリティーへ —」(劉綺紋氏との共著、春木がファーストオーサー).『言語における時空をめぐって』pp.33-42. 言語文化共同研究プロジェクト 2002, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2003 年 4 月.
43. 「浸食する植物 — 「夏至」の世界 —」『映像と文化』III, pp.24-33. 言語文化共同研究プロジェクト 2002, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2003 年 4 月.
44. 「回想と語り — 複合過去と単純過去の交替 —」『言語における時空をめぐって』pp.25-32. 言語文化共同研究プロジェクト 2002, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2003 年 4 月.
45. 「事態認識の方策としての半過去 — 絵画的半過去を中心として —」『言語文化研究』30, pp.229-251. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2004 年 3 月.
46. 「複合過去と単純過去」『言語における時空をめぐって』II, pp.35-45. 言語文化共同研究プロジェクト 2003, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科, 2004 年 5 月. (フランス語版: Le passé simple et le passé composé :

- sphère subjective et univers objectif. Kawaguchi, J., K. Kida et K. Maejima (éd) *Cognition et émotion dans le langage*. Keio University, pp.25-40. 2006 年 3 月)
47. 「緩和表現の半過去について」『言語における時空をめぐって』III, pp.31-40. 言語文化共同研究プロジェクト 2004, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2005 年 5 月.
 48. 「メトニミーと再帰構文」『フランス語学研究の現在』pp.97-113. 白水社. 2005 年 11 月.
 49. 「古フランス語における物語的現在と半過去についての序章」『シュンボシオン』pp.33-42. 朝日出版社. 2006 年 3 月.
 50. 「自伝における過去形の用法について —Barbara の自伝における単純過去—」『言語における時空をめぐって』IV, pp.31-40. 言語文化共同研究プロジェクト 2005, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2006 年 5 月.
 51. 「vélo と bicyclette —現代フランス語における言語位相について—」『言語と文化の展望』pp.559-573. 英宝社. 2007 年 3 月.
 52. 「スキヤニング操作と単純過去」『言語文化研究』33, pp.81-101. 大阪大学大学院言語文化研究科, 2007 年 3 月.
 53. 「フランス語の再帰構文受動用法におけるモダリティーについて」『言語における時空をめぐって』V, pp.31-40. 言語文化共同研究プロジェクト 2006. 大阪大学大学院言語文化研究科, 2007 年 5 月.
 54. «L'imparfait : temps attributif» *Actes du XXIV^e Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes* IV, pp.541-549. 国際ロマンス語言語学・文献学会, 2007 年 6 月.
 55. 「現代フランス語における名詞から前置詞への文文化」『テキストの生理学』pp.181-193. 朝日出版社. 2008 年 2 月.
 56. 「事態の主観的把握について」『言語における時空をめぐって』VI, pp.31-40. 言語文化共同研究プロジェクト 2007. 大阪大学大学院言語文化研究科, 2008 年 5 月.
 57. 「フランス語の再帰構文受動用法の一体性について」『言語文化研究』35, pp.119-140. 大阪大学大学院言語文化研究科, 2009 年 3 月.
 58. 「事態の主観的把握の方策としての時制」『言語における時空をめぐって』VII, pp.41-50. 言語文化共同研究プロジェクト 2008, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2009 年 5 月.
 59. 「英仏両言語における売買動詞と中間構文 —中間構文と再帰構文受動用法の成立要因の違いについて—」『言語における時空をめぐって』VIII, pp.60-69. 言語文化共同研究プロジェクト 2009, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2010 年 5 月.
 60. 「生物主語から無生物主語へ —日仏対照研究—」『言語文化研究』37, pp.99-119. 大阪大学大学院言語文化研究科, 2011 年 3 月.
 61. 「フランス語の認知モードについて」『言語における時空をめぐって』IX,

- pp.61-70. 言語文化共同研究プロジェクト 2010, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2011 年 5 月.
62. 「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』38, pp.45-65. 大阪大学大学院言語文化研究科, 2012 年 3 月.
 63. 「英仏両言語における中間構文の違いについて —認知モードの観点から—」『時空と認知の言語学』I, pp.49-58. 言語文化共同研究プロジェクト 2011, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2012 年 5 月.
 64. 「指示形容詞の概念指示用法について —「周知の指示形容詞」を中心に—」『フランス語学の最前線』第 1 巻, pp.79-114. ひつじ書房, 2012 年 6 月.
 65. 「フランス語におけるオノマトペ効果について」『川口順二教授退任記念論文集』（ウェーブ出版 http://web.keio.jp/~kida/hommage_kawaguchi.pdf), 2012 年 12 月.
 66. 「フランス語のオノマトペ —オノマトペの名詞性をを中心に—」『時空と認知の言語学』II, pp.49-58. 言語文化共同研究プロジェクト 2012, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2013 年 5 月.
 67. 「ça mouille (ça + 動詞) 構文のネットワーク」『時空と認知の言語学』III, pp.41-50. 言語文化共同研究プロジェクト 2013, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2014 年 5 月.
 68. 「フランス語の時制と認知モード —時間的先行性を表わさない大過去を中心に—」『フランス語学の最前線』第 2 巻, pp.1-44. ひつじ書房, 2014 年 5 月.
 69. 「ÇA を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48, pp.63-84. 日本フランス語学会, 2014 年 6 月.
 70. 「tout un N —数量表現から強意表現へ—」『時空と認知の言語学』IV, pp.41-50. 言語文化共同研究プロジェクト 2014. 大阪大学大学院言語文化研究科, 2015 年 5 月.
 71. 「tout の強意用法について」『フランス語学の最前線』第 3 巻, pp.61-105. ひつじ書房, 2015 年 5 月.
 72. 「再び ça mouille (ça + 動詞) 構文の特性について」『時空と認知の言語学』V, pp.31-40. 言語文化共同研究プロジェクト 2015, 大阪大学大学院言語文化研究科, 2016 年 5 月.
 73. 「話し言葉における名詞の機能語化について —côté, question, façon, genre, style, histoire de, etc.—」『フランス語学の最前線』第 4 巻, pp.85-125. ひつじ書房, 2016 年 5 月.

(2016 年 11 月 17 日現在)

概説

1. 「フランス語への架け橋」『フランス』1984 年 4 月号－1985 年 3 月号 (12 回連載), 白水社.
2. 「認知的フランス語研究」『月刊言語』24-3, pp.28-35. 大修館書店, 1995 年

3月.

3. 「フランス語の発想・日本語の発想」『ふらんす』2001年4月号－2002年3月号(12回連載), 白水社.
4. 「はなし言葉と書き言葉」『ふらんす』2000年10月号－2000年12月号(3回連載), 白水社.
5. 「半過去は難しくない」『フランス語学研究』41, pp.113-116. 日本フランス語学会, 2007年6月.
6. 「フランス語再帰構文受動用法の諸相」『「文意味構造」の新展開 ― ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望』(日本独文学会研究叢書 No.73) pp.66-88. 日本独文学会, 2010年10月.
7. 「中世における時間の表わし方 ―古期フランス語に見る時制の用法―」*GALLIA L*, pp.11-18. 大阪大学フランス語フランス文学会, 2011年3月.

口頭発表

国際学会

1. «Impersonnel du français —Ses caractéristiques et son implication théorique» 第3回日・仏学術シンポジウム言語学部門, 早稲田大学, 1982年10月.
2. «Le “démonstratif de notoriété” en français moderne» 第19回国際ロマンス語言語学・文献学学会, スペイン, サンチアゴ・デ・コンポステラ大学, 1989年9月.
3. «Reprise pronominale et référentialité discursive» 第20回国際ロマンス語言語学・文献学学会, スイス, チューリッヒ大学, 1992年4月.
4. «L'imparfait : temps attributif» 第24回国際ロマンス語言語学・文献学学会, イギリス・ウエールズ, アベリストゥイス大学, 2004年8月.

国内学会

1. 「Marie de France の Lais の韻について」, 日本フランス語フランス文学会(天理大学), 1976年10月.
2. 「古フランス語における2格体系の崩壊と語順の関係について」, 日本ロマンス語学会(大阪女子大学), 1977年5月.
3. 「古フランス語における否定を用いた最上級表現について」, 日本フランス語フランス文学会関西支部大会(追手門大学), 1977年11月.
4. 「古フランス語における性・数・格について」, 大阪(外大)言語学研究会研究発表大会(現関西言語学会)(大阪外国語大学), 1977年.
5. 「フランス語の非人称 ―副詞的要素の機能を出発点に一」, 日本フランス語学研究会(現日本フランス語学会)(上智大学), 1982年12月.
6. 「ルーマニア語における目的語の代名詞による二重化について」, 日本ロマンス語学会(大阪大学), 1983年5月.
7. 「ルーマニア語の冠詞について」, 日本ロマンス語学会(愛知県立大学), 1984

年5月.

8. 「自立形代名詞 moi の左方遊離について」, 日本フランス語学研究会 (現日本フランス語学会) (上智大学), 1987年12月.
9. 「現代フランス語における『周知の指示形容詞』について」, 日本フランス語学会 (上智大学), 1989年6月.
10. «Sur le démonstratif de notoriété en français moderne et le démonstratif japonais "ano"», L'École des hautes études en sciences sociales (社会科学高等研究所), フランス・パリ, 1989年9月.
11. 「ça pleut / il pleut —現代フランス語の“非人称主語”のçaをめぐる—」, 日本ロマンス語学会 (京都産業大学), 1990年5月.
12. 「Je ne savais pas que c'était comme ça —再確認の半過去—」, 日本フランス語フランス文学会 (東京大学), 1991年6月.
13. 「ジェロンディフ —現在分詞構文との比較を中心に—」, 日本フランス語学会 (上智大学), 1991年7月.
14. 「中立的代名動詞と受動的代名動詞の意味論」, 日本フランス語学会 (上智大学), 1993年12月.
15. 「発話者・視点・視点移動・過去空間・基準時点」, ミニ・シンポジウム「半過去をめぐる諸問題」, 日本フランス語学会 (青山学院大学), 1998年4月.
16. 「J'ai rencontré un immigré qui arrivait du Kosovo —半過去の属性付与機能について—」 日本フランス語フランス文学会 (明治学院大学), 2000年5月.
17. 「主観性と複合過去」, 日本フランス語学会 (早稲田大学), 2001年12月.
18. 「認知言語学的観点からの日・仏語対照研究の可能性」, ミニ・コロック「日仏対照言語学の方法と実践」, 日本フランス語学会 (早稲田大学), 2002年7月.
19. 「古期フランス語の時制 —半過去、物語的現在、単純過去など—」 シンポジウム「時・相・法: フランス語・ドイツ語・スペイン語の対照的観点から」, 日本フランス語学会 (東京大学), 2005年12月.
20. 「Ce fut ma première rencontre avec le passé simple —スキャニング操作と単純過去—」, 日本フランス語学会 (東京大学), 2006年6月.
21. 「La vengeance est un plat qui se mange froid —再帰構文受動用法とモダリティー—」, 日本フランス語学会 (東京大学), 2007年12月.
22. 「フランス語の指示詞について」, パネルセッション「文脈指示の対照研究から見えてくるもの —日本語、韓国語、フランス語、英語を通して—」, 日本語文法学会 (甲南大学), 2008年10月.
23. 「フランス語再帰構文受動用法の諸相 —モダリティーを中心に—」, シンポジウム「文意味構造」の新展開 —ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望—」, 日本独文学会 (名古屋市立大学), 2009年11月.
24. 「認知モードから見た現代フランス語の再帰構文受動用法 —英語の中間構文との対比を通して—」, 日本フランス語学会 (慶應義塾大学), 2010年12月.

25. 「現代フランス語の認知モードについて」, 日本フランス語学会 (慶應義塾大学), 2011 年 12 月.
26. 「Il pleut, ça mouille, c'est la fête à la grenouille — Ça を主語とする発話について」, 日本フランス語学会 (跡見学園女子大学), 2012 年 12 月.
27. 「大過去の前景化効果について—時間的先行性を表わさない大過去—」, 日本フランス語学会 (跡見学園女子大学), 2013 年 11 月.
28. 「tout の強意用法について」 日本フランス語学会 (早稲田大学), 2014 年 12 月.

書評

1. 大賀正喜・ガブリエル・メランベルジェ著『和文仏訳のサスペンス —翻訳の方法』(白水社). 大阪日仏センター広報パンフレット, 1988 年 4 月.
2. 朝倉季雄著『フランス文法論 探索とエッセー』(白水社). 『フランス語学研究』 24, pp.56-62. 日本フランス語学会, 1990 年 6 月.
3. 佐藤房吉他著『詳解フランス文典』(駿河台出版社). 『フランス語学研究』 26, pp.81-82. 日本フランス語学会, 1991 年 6 月.
4. 小田涼著『認知と指示 定冠詞の意味論』(京都大学出版会) Cahier 14, pp.25-27. 日本フランス語フランス文学会, 2014 年 9 月.

文献解題

1. 「文献案内: 指示詞研究」(井元秀剛氏と共著)『フランス語学研究』 29, pp. 88-95. 日本フランス語学会, 1995 年 6 月.
2. 「文献案内: 半過去研究」(安部宏氏、前島和也氏との共著)『フランス語学研究』 34, pp.56-69. 日本フランス語学会, 2000 年 6 月.

翻訳書

1. 『フランス語音韻論 — 生成音韻論入門』(林栄一氏監訳、林博司氏と共訳). フランソワ・デル著, 研究社, 1981 年 8 月.
2. 『言語構造と普遍性』(東郷雄二氏、藤村逸子氏との共訳). クロード・アジェージュ著, 白水社, 1990 年 11 月.

報告

1. 「国際ロマンス語文献学・言語学学会報告」『フランス語学研究』 24, pp.76-78. 日本フランス語学会, 1990 年 6 月.
2. 「古期フランス語の時制 —半過去、物語の現在、単純過去など—」, シンポジウム「時・相・法: フランス語・ドイツ語・スペイン語の対照的観点から」(東京大学), 『フランス語学研究』 40, pp.85-87. 日本フランス語学会, 2006 年 6 月.

エッセー

1. 「ストラスブール大学の思い出 ―外国語の授業を中心に―」『言文だより』No.1, pp.13-16. 大阪大学言語文化部, 1984 年 3 月.
2. 「フランス語とフランス映画」『言文だより』No.9, pp.7-10. 大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科. 1992 年 3 月.
3. 「フランス映画の現在（いま）」『創造と実践』No.1, pp.56-61. 大阪大学全学共通教育機構・教育方法研究委員会, 2001 年 3 月.
4. 「追悼：朝倉季雄先生」, ニュースレター第 9 号, 日本フランス語学会, 2001 年 6 月.